

現代シャンソンに学ぶフランス流愛の表現

もうすぐ恋人たちの祝日、le jour de la Saint-Valentin（サン＝ヴァランタン）。カトリックの祝日が愛に結びついたのは中世のころと言われていますが、クリスマスの次に多くのカードが送られるのがこの日で、送り主の85%は女性ということです。日本と違い欧米では女性から男性限定ではなく、男女にかかわらず恋人たちや夫婦、カップルがプレゼント（たいていチョコレートか花）を贈り合います。

フランス人の愛に対する並々ならない執着は、映画の世界でもお馴染みです。そんなの映画の中だけとされている方、一歩フランスの土を踏めばそれが決して絵空事ではないことがたちどころにして理解できるでしょう。公園のベンチで、カフェのテラスで、学校の校庭の隅で、les amoureux（恋人たち）は人目をはばかりことなくキスしたり、そこだけ時間が止まっているかのごとく抱きあったまま自分たちだけの世界に浸っています。それは男と女に限りません。一度パリの街角で中年の女性と恋人と思いき若い女性の喧嘩の場面に出くわしました。中年が若い方を何やら大声でひどく責めていたかと思うと年下彼女が泣き出し、中年がやおら抱きしたためたと思ったらしばし熱烈なキス、その後仲良く腕を組んで去って行きました。まったく映画の一シーンを見るようで、鮮烈な記憶として残っています。

フランス人というのは、恋愛において比較的淡泊な（昨今は草食系男子増殖中という憂うべき？現象も広がっているようです）私たち日本人には想像しがたい *vie sentimentale*（感情生活）をエネルギーに生きているようで、男女に限らず男同士、女同士でくっついたり離れたり、まあマメなことよと感心するばかりに妥協を許さず、*profiter de la vie*（人生を楽しむこと）を追求していますね。それにいちいち付き合わされる子どもはたまったものではありませんが、幼いころから大人の恋愛模様、周りにあふれる愛の場面に晒されているだけでなく、人間同士のスキンシップも密ですから自然に鍛錬されて世界に冠たる愛の国の住人として育っていくのでしょう（笑）

前置きが長くなりましたが、フランスのシャンソンに見られる愛の表現をいくつか拾ってみようと思います。日本ではシャンソンと言うと伝統的に中年以上の方に愛好者が多いようで、現代フランスの曲は残念ながらほとんど知られていないようです。CDショップの洋楽コーナーになるのもほとんどが英米のアングロサクソン系の音楽で、フランスものは大きなショップでもワールドミュージックコーナーなどにほんの少し置いてあるだけ、小さいお店には往年のシャンソンの名曲集や廉価版しかない、というのが現実です。しかしながらインターネットの普及で今ではフランスやフランス語圏のミュージシャンの曲もク

リップ付きで簡単に視聴でき、歌詞も検索できるようになりました。TV5MONDE でも土曜日の Paroles de clips や Acoustic をはじめとする、フランスの音楽に親しむことができる番組、サイトのコンテンツが充実していて日本でフランス音楽を楽しむために欠かすことができないツールになっています。フランス音楽の特徴は、映画にも通じるものですが「ことば」に重きを置いている点だと思います。フランス人は徹頭徹尾おしゃべりで、詩人で哲学者です。

まずは、セルジュ・ゲンスブール大先生から。この方を語らずして現代フランス音楽を語ることはできないほどの大物ですね。ゲンスブールからフランス語に入って行ったという方も多いのではないのでしょうか。あのあまりにも有名なシャンソンのタイトル “Je t’aime. Moi, non plus”（愛してる。俺も愛してない）。non plus はふつう否定文の後に使うと習いましたよね。Je t’aime. Moi aussi.（愛してるわ。俺も愛してる）か Je ne t’aime pas. Moi, non plus.（愛してないわ。俺も愛してない）ならスッキリするのですが、この何とも釈然としないイジワルな逸脱は、ゲンスブールならではのシニスムの真骨頂と言えるものでしょう。次の歌詞はいろいろな人がカヴァーしている “Comme un boomerang”（ブーメランのように）から。

J'ai sur le bout de la langue	思い出しそうだ
Ton prénom presque effacé	忘れかけてた名前
Tordu comme un boomerang	ブーメランみたいにひんまがって
Mon esprit l'a rejeté	私の心はそれを振り払った

思い出そうとしてなかなか思い出せない言葉がそこまで出てきているとき J'ai sur le bout de la langue（舌先に乗ってる）という言い方をします。

Patricia Kaas（パトリシア・カース）は歌唱力に定評がある大物女性歌手です。父はフランス人、母はドイツ人で子どもの頃はドイツ語しか話せなかったそうです。この人の代表的ヒット曲の一つに “Mon mec à moi”（私の男）というのがあります。前置詞の à は所属を表しますが、不実な男のたわごとをわかっているながらもそれでも信じたい女心を歌ったものです。

Sa façon d'être à moi	彼と私の関係
Sans jamais dire je t'aime	一度も愛してると言わない
C'est rien que du cinéma	作り話ばかり
Mais c'est du pareil au même	映画と一緒に

façon という語は「やり方、流儀」という意味ですが、幅広く使い出のあることばですね。

sans façon (気取らずに、ざっくばらんに)、façon de dire (ものの良いよう、言葉のあや) etc. du cinéma は部分冠詞がミソ。ふつう映画には le cinéma と定冠詞をつけますが、du cinéma というと、わざとらしい行動などを指したりします。「茶番はやめろ」というとき ”Arrête ton cinéma.” と言ったりします。”du pareil au même” は「まったく同じ」という意味。

パトリシア・カースをもう一つ：“Il me dit que je suis belle” (はかない愛だとしても) からひとつ (原題と邦題の違いにも注目)。

Il me dit que je suis belle 彼は私を美しいと言う
Et qu’il n’attendait que moi 私だけを待っていたと
Il me dit que je suis celle 彼は言う
Juste faite pour ses bras 私は彼に抱かれるのにふさわしい女だと

二行目はそのまま Je n’attendais que toi. (あなた ou きみだけを待っていた) という決め台詞として使えます。三行目の最後指示代名詞 celle はたいてい関係代名詞 qui や que が続くことが多いのですが、過去分詞をそのまま形容詞的に続けて「... なる人」という使われ方をしています。また、être fait pour は「... に向いている、... に相応しい」という意味で、Je ne suis pas fait(e) pour ça. (私それ苦手・不得意) という言い方をよくします。

それでは最後に現フランス大統領ニコラ・サルコジ氏夫人で元トップモデル、その後歌手に転身した Carla Bruni-Sarkozy (カルラ・ブリュニ=サルコジ) の « Le toi du moi » から。

Je suis ton pile, tu es mon face, 私はあなたの裏、あなたは私の表
Toi mon nombril, et moi ta glace, あなたはわたしのへそ、私はあなたの鏡
Tu es l’envie, et moi le geste, あなたは欲望、私はしぐさ
Toi le citron, et moi le zeste. あなたはレモン、私は皮

...

この toi..., et moi... がえんえんと続く歌ですが、あのハスキーヴォイスで想像力あふれる歌詞を弾き語りで聞かされたら、サルコジ氏もさぞかしぐっときたことでしょうね。。おもえば二人ともいろいろな恋愛遍歴や結婚、離婚を繰り返し envie に忠実にやってきた人たちです。そういう人たちが大統領と夫人と言うのですから、国民もそれを受け入れているのですから、恐るべしフランス、こと恋愛に関しては Chapeau! (脱帽)

ヴァレンタインと言えばチョコレート。フランスには愛だけではなく Haute-pâtisserie もあります。五感を楽しませながらフランス語の勉強を続けてまいりましょう。

Bonne Saint-Valentin !